

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Hiroki Fujiwara

1985年鳥取県生まれ。設計士である父の影響もあり、幼いころから大工に興味を持つ。大阪の建築専門学校を卒業後、日本有数の宮大工集団「金剛組」に入社。以来、研鑽の日々を送る。



宮大工(みやだいく)

神社仏閣の建築、国宝・重要文化財指定の建造物の修復などを手掛ける大工。創業約1400年の歴史を有する「金剛組」は「四天王寺」のお抱え宮大工として栄え、現在は約100名の職人が伝統を受け継ぐ。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE



WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉

検索



TV番組

ディスカバリーチャンネル (CS)

冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中

毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!



最新号のご案内 好評公開中

No.068 / 壺屋焼職人 高江洲 尚平 氏

宮大工 藤原弘揮 氏

数百年と残る建造物を、丹精込めてつくる。

日本の伝統建築である神社仏閣。数百年という歳月を重ねることができ、建造物は、言うまでもなく木でつくられる。その建築を手掛ける職人が、宮大工。国宝に指定された建造物の修復も担う、伝統建築の専門的な知識と技術を持つ大工だ。

藤原弘揮さんは、宮大工の道を極めようとする若き職人。約千四百年前の飛鳥時代に創業された、大阪の宮大工集団「金剛組」で日々、汗を流す。

きっかけは？

藤原「父が設計士だったことから、いずれば建築の仕事をしたと考えていました。宮大工に憧れたきっかけは、地元の断崖絶壁に立つ国宝『投入堂』を見たこと。そんなすごい建物を千年以上も前につくった人がいて、それを直す人がいることに感銘を受け、自分もやりたいと思ったんです」

社寺建築の要は、木組みという技法。凹凸を刻み、木を組み合わせる手業が、木材の経年変化や強い揺れにも柔軟に対応する強さを引き出す。

今では補強のために金物を使うが、あくまでも建造物を支えるのは木組みの技。腕利きの宮大工が凹凸を合わせ、次々に木と木を組み上げ、軒の深い社寺独特の建築美を形づくる。その随所には、千年以上にわたり受け継がれてきた知恵と技が息づく。例えば、軒を横切るように通す桔木はねぎ。これはテコの原理を利用して、深い軒が自らの重みで下がるのを防ぐための仕組み。大きな屋根を支える梁には、松の巨木を使う。松は強靱で粘り強い一方、曲がりやねじれが生じやすい。その特性を巧みに利用することで、より抜けにくい木組みにするのだ。

藤原さんは現場での作業に加え、木の組み方を考え、凹凸を刻む部分を指示する役割も担う。これは第二の

設計といわれる重要な作業だけに、プレッシャーも大きい。

今後の抱負は？

藤原「自分の指示が間違っていたらどうしようと思うと、不安で寝られないこともあります。でも、苦しみことは一人前になるための試練であり、それを乗り越えるために全力を尽くすだけです」

宮大工への強い憧れと意欲を持ってこの道に入った若き職人は、決して下を向くことなく、重圧さえも力に変える。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2013年5月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!

一人前の宮大工を目指して、木に全力で向き合う姿を動画で紹介しています。ぜひご覧ください。